国語

第一問　左は、佐伯啓思『自由とは何か　「自己責任論」から「理由なき殺人まで」』の一節である（ただし、一部改変した）。これを読んで、後の問いに答えよ。

今日では誰もが「自由」は最も大切な価値だと考えている。このことにあえて異をはさむ者はいないだろう。だが、同時にまた、今日、自由という言葉はもはや人々の心を揺さぶるような響きを持っていない。A人々は自由に飽きているようにさえ見える。どうしてこうなったのだろうか。果たして、今日、われわれにとって、「自由」とは何を意味しているのだろうか。誰もが、口では「自由の実現」こそが現代の課題だという。だが、現代社会において、「自由の実現」が課題だというときに、本当のところ何が問題になっているのだろうか。

少し前に二十人ほどの少人数の学生の講義で聞いてみたことがある。「君たちにとって自由は重要なものだと思うか」。当然、全員が「自由は大事なものだ」という。「では、現在、君たちは何かに不自由な思いをしており、自由がキョウ(ア)受できていないと思うか」。すると、ほとんどが「別に問題はない」という。そこで続けて聞いてみる。「では、現在、日本の問題は、個人の自由が侵害されている点にあるのか、それとも、自由を縛るはずの道徳規範や拘束がゆるんでしまっている点にあるのか、そのどちらが問題なのだろうか」。これに対しては、おおよそ三分の二が「道徳、規範が崩壊していることのほうが問題だ」と答えるのである。

もちろん、これは、自由とは何かなどという厳密な議論を踏まえたものではないし、各学生の単なる印象に過ぎない。たまたま私の講義に出席した学生がそうした関心の傾向を持っていただけかもしれない。しかしそれでも、B自由が侵害されている、自由がキョウ受できていないという切迫した感じは、今日の日本の若者たちにはほとんどないといってもよいだろう。

こんなことなど、わざわざ若者に聞いてみなくとも、彼らを見ていればわかるではないか、と読者はおっしゃるかもしれない。

確かに、今日の、とりわけ日本の若者ほど、自由気ままに二十四時間をフル活用で楽しんでいる者はいないであろう。ケータイやクルマやゲームセンターやファミレスなどという小道具や舞台にも事欠かない。

しかし、「自由」はいつも脅かされ、自分が本当にやりたいことができず、何かによって縛られていると感じるのが、古今東西、若者の特権ではなかったろうか。ここで「特権」というのは、本当は彼らほど社会的に恵まれた立場にあって、実際上、彼らほど自由な存在はないということである。特に、大学生であることは人生最良のC モラトリアムである。

しかし、にもかかわらず、あるいは、だからこそ、若者ほど、自由を徹底的に謳歌(おうか)したがる者もいなかったし、観念的であれ、自由はいつも侵害されているという憤りを持っていたものであった。社会的なしがらみや生計の不安がないからこそ、自由や社会正義のために現状を批判するのが若者の特権であった。

もしも、実感として「自由」が侵害されていないとなれば、かつてなら、「われわれは資本主義的な管理システムによって飼いならされている」などという理屈をひねり出したものであった。「見かけ上の自由がたっぷり与えられていることこそが実は不自由なのだ」などという一見気の利いたことをいう者もいたはずである。[a]、若者にとっては、われわれが生きているこの社会は、人間の自由を抑圧する不合理なものでなければならないのであった。

ところが、今日の学生たちは、そのような感覚も理屈も感じないように見える。ついでに、「仮に何かをしたいために、いま、自由が欲しいとすれば、その『何か』とは何なのだろうか」とたずねてみた。ひと通り聞いてはみたのだが、ほとんど答えらしいものは返ってこないのである。これはいったいどうしたことであろうか。

確かに、「自由」が大事なものであることにひとまずは誰もが同意するであろう。しかし、「自由」が現代社会で本当に問題なのかどうかというと、よくわからない。

[b]、「自由」が、もしも、本来、人間にとって第一級の課題だとすると、われわれは今日、その第一級の課題についてもはや強い関心を持てなくなっている、ということになろう。D 今日の思想の衰退、世の中に対する切迫した関心の衰退、

もっといえば全般的な生の衰弱といった事態は、このことと決して無関係ではないようにも思われる。

それにもかかわらず、依然として自由は、少なくとも社会科学の最も重要なテーマとなっている。社会思想史、哲学、政治学、経済学を含めて、人間は自由であるべきであるし、本来、自由な存在だと説いている。自由の実現は、今日の社会科学においてはイシ上命題とみなされている。

特に、政治哲学や社会学を中心とした「自由論」は、一九八〇年代末このかた最もホットなテーマであり、「自由の基礎づけ」や「自由の正当化」「リベラリズムの理論構成」といった議論が精力的に展開されてきた。また、経済学でも、「新自由主義」を中心に、経済活動の自由を実現することこそが、今日の最大の経済上の課題だと主張されている。

イ

こうして、一見したところ奇妙な情景が展開されているというほかない。専門家たちによる「自由」をめぐるこの上ない活発で精緻（せいち）な議論と、一般的な「自由」に対する関心の衰弱の間には大きな乖離（かいり）が生じつつあるのだ。先の学生にしてもそうなのだが、一般的には、「自由」への要求は、今日のたとえば日本において決して切実なものではなくなっている。にもかかわらず、専門家たちは、多くの場合、アメリカのリベラリズムをめぐる論争を下敷きにしながら、「自由」についてのきわめて精緻な議論を展開しようとしている。

ロ

そして、考えてみれば、この両者は、ある意味では、同じことの二様のあらわれといっていえなくもない。

もしも、われわれが言論を統制され、生活も規制され、政治的にも抑圧された社会に生きておれば、誰も、何年にもわたって「自由についての理論」などを構想したり議論したりしようとはしないだろう。「自由の内容は何か」、「自由はどうして正当化されるのか」、といった小難しい議論を果てしなく続けるなどということは考えにくい。それよりも、いま、ここで「自由」を手に入れるために何らかの活動を起こそうとするのではないだろうか。「自由」とは何かと首をかしげ、論争する以前に、「自由」が何であるかは明らかなはずなのである。

ハ

こうした状況にあれば、「自由」の根拠がなんであろうと、いま、ここでわれわれが必要としている「自由」が何であるか、は明らかなのである。「自由」とは何かと考えあぐねるよりも前に、「自由」とは何であるかを感じ取っているのである。そしてそのために身を挺して活動するものである。

しかし、われわれは、もはやそんな幸せな状態にはいない。いや、その逆にわれわれははるかに幸せな時代に生きているというべきかもしれない。少なくとも、もっと贅沢な時代にいることは間違いないだろう。「自由」への要求がさほど切実なものではなくなった時代だからである。「自由」についての論争が延々と続くということ自体、いかに今日の日本では「自由」が切実なものではなくなってしまったかを示している。だからこそ、「自由」を改めてどのように定義し、どのように理解すればよいのかが「理論的な」テーマになってしまうのだ。そんな贅沢な時代と社会にわれわれは生きている。

c 、一般のレベルでの「自由」に対する関心の低下と、他方で、社会科学や哲学系の専門家の間での「自由」に対する関心の高揚は、ある意味では同じことの二様の側面といってもよいのではなかろうか。

このことを私は、別に、「自由」を理論として論じようとする社会科学系の専門家に向けた皮肉としていっているわけではない。現に、私もここで「自由」について思弁的に論じているのだから、専門家ではないものの、私も贅沢な時代の「暇つぶし」をしているようなものかもしれない。そのことは自覚した上での議論である。

ニ

こうして、「自由」に対する「専門的」で「理論的」な関心の高まりと、実生活での「自由」に対する関心の低下、という今日の事態は、われわれの時代の「自由」の位置を象徴しているともいえよう。本当に「自由」を必要としているとき、人は、「自由」とは何か、「自由」の正当性の根拠は何か、などという議論などしない。

そしてここに実は、「自由」なるものの、ある決定的な特質がある。それは、本当の意味で、われわれは「自由」について決して語ることなどできないのではないか、ということだ。

「自由」を真に必要とし、真にカツ望(ウ)するとき、われわれはもはや「自由」についてあえて語らないし、その必要も感じない。そのときに、われわれがとる行動そのものは「自由」と呼び得るようなものではなく、また、その行動を「自由な行動」などと呼ぶ必要もないであろう。

ホ

少々、抽象的に結論を急ぎすぎた。セイ急(エ)に議論をある方向へ向けるのはよそう。ただ、「自由」という観念にはある種のパラドックスがどうしても付きまとうということを、ひとつのヨ断(オ)として持っていただきたい。

そのパラドックスとは、「自由」についての議論は、「自由」について正面から論じれば論じるほど、「自由」そのものからは遠ざかってしまうだろうということ、そして、真に「自由」を求める者は、それを決して「自由」の名では呼びはしないということ、このことである。

［ 中　略 ］

「自由」の観念がいかに特権的な意味を与えられてきたかは、次のことを考えてみても明らかであろう。

近代社会は、すべての人の「生命、財産、自由」を確保する運動から始まったとされる。しかし、生命が危険にさらされるとき、誰も「生命」とは何か、などという議論はしない。そしてまた、「生命」の安全がひとたび確保されてしまえば、また「生命とは何か」などと問わない。「財産」についても同じである。「財産」が手にできないときには、「財産」を獲得するために奔走するだけである。「財産」が確保されてしまえば、もはや誰も、特に「財産の理論的基礎」などに関心を持たない。

d

、「自由」の場合だけは少し違っている。「自由」が一応、保障されたにもかかわらず、専門家たちは、改めて自由の定義づけや意味づけに関して頭を悩ませているのである。

問1　傍線部Aと筆者が考えるのはなぜか。最も適切なものを次から選べ。 1

① 自由が大事なものだと感じるのは若者だけだから
② 一般のレベルでは自由の実現の価値が下がっているから
③ 道徳規範や拘束がゆるみ自由の実現どころではないから
④ 専門家による「自由論」はすでに語り尽くされたから
⑤ 新しいことを始める意欲がなく自由を求めていないから

問2　傍線部Bと筆者が考えるのはなぜか。最も適切なものを次から選べ。 2

① 日本の若者たちにとって、ケータイやクルマは身近なものだから
② 日本の若者たちは、自分がやりたいと思っていることを、実践しづらい環境にあるから
③ 日本の若者たちにとって、現代社会は自由を抑圧するものだから
④ 日本の若者たちは、自由を抑圧される感覚も理屈も感じないように見えるから
⑤ 日本の若者たちにとって、資本主義的な管理システムは興味がないものだから

問3　傍線部Cの語句の説明として、最も適切なものを次から選べ。 3

① しばらく休むこと、猶予期間のこと
② 自由主義、自由であること
③ 一貫した自己や自我の意識のこと
④ 秩序がない状態のこと
⑤ 理想郷、理想的な世界のこと

問4　空欄aからdに入る言葉の組み合わせとして、最も適切なものを次から選べ。 4

① a　だから　b　要するに　c　つまり　d　しかし
② a　つまり　b　ということは　c　または　d　最終的には
③ a　ともかくも　b　要するに　c　または　d　最終的には
④ a　つまり　b　しかし　c　つまり　d　そして
⑤ a　ともかくも　b　ということは　c　だから　d　しかし

問5　傍線部Dのような事態になる理由として、最も適切なものを次から選べ。 5

① 「自由の基礎づけ」や「リベラリズムの理論構成」はすでに解決しており、現代社会で取り扱う問題ではないから
② 今日の学生たちは、自由気ままにケータイやクルマやゲームセンターなどをフル活用して楽しんでいるから
③ 自由の謳歌について徹底的にこだわるのは学生時代の特権であるから
④ われわれは言論の統制や政治的な抑圧がない贅沢な社会に生きているから
⑤ 「自由」が何であるかは、誰から見ても明らかであるから

問6　次の一文は、文中の空欄イからホのうちどこに入るか。最も適切なものを次から選べ。 6

何か、この落差が私には気になるのである。

① イ　② ロ　③ ハ　④ ニ　⑤ ホ

問7　傍線部Eの説明として、最も適切なものを次から選べ。 7

① アメリカのリベラリズムをめぐる論争を下敷きにしながら、日本の「自由」を精力的に展開しようとすること
② 「生命」の安全を確保できない時はそれを獲得するために奔走し、ひとたび確保されれば関心を持たなくなること
③ 「自由」とは、それが何であるかを理論的に考える対象ではなく、直感で感じ取るものであること
④ 若者が「自由」を実感できる幸せな状態は、社会全般としては「自由」を実感できない不幸な状態であること
⑤ 「自由」に対する専門的な関心は高まるが、一般的には「自由」への関心が低下すること

問8　筆者の主張と合致するものとして、最も適切なものを次から選べ。 8

① 「自由」は現代の日本において最も大切な価値があるという共通認識があるにもかかわらず、若者については関心が薄れている
② 「自由」は若者だけが謳歌でき、社会正義のために批判することができるため、他の立場のものはキョウ受することはできない
③ 「自由」をカツ望してとる行動こそが自由であるが、無意識のもとにとる行動でもあるためそれに気づいていない人が多い
④ 「自由」は専門家であっても定義づけることが難しく、理解しようとすればするほど本質からは遠ざかってしまうような捉え難いものである
⑤ 「自由」とは求めれば求めるほどかけ離れてしまうような捉え難いものであるから、現代の大学生や若者が問題に考えることはできない

問9 文中の二重傍線部㋐から㋓のカタカナ部分と同じ漢字を用いるものを次から一つ選べ。

9

㋐ キョウ受

① キョウ楽にふける　② 佳キョウを迎える　③ 料理を提キョウする
④ キョウ養が深い　⑤ キョウ中に秘める

10

㋑ シ上

① 歴シ上の人物　② シ難の業　③ チームのシ気を高める
④ シ給品を受け取る　⑤ シ策を講じる

11

㋒ カツ望

① 包カツ的な指標　② 時間の都合でカツ愛する　③ 警察署の管カツ地域
④ 想像力の枯カツ　⑤ 円カツに進める

12

㋓ セイ急

① 商品のセイ能　② 遠セイに出る　③ 昏睡状態から覚セイする
④ 閑セイな住宅街　⑤ 選手宣セイをする

13

㋔ ヨ断

① 改善のヨ地　② ヨ行演習をする　③ 名ヨを守る
④ ヨ金を確認する　⑤ 奨学金の貸ヨ

第二問　左は、久保明教『機械カニバリズム』の一節である（ただし、一部改変した）。これを読んで、後の問いに答えよ。

知的な能力をもつ機械に対するさまざまな呼び名が登場している。「人工知能（ＡＩ）」、「コンピュータ」、「将棋ソフト」、「スマートフォン」、「ロボット」。それぞれ異なった技術的要素によって構成される人工物であるから、本書のように連続的に扱うのは奇妙に思われるかもしれない。だが、将棋ソフトが棋士を凌駕（りょうが）する実力をもつに至って「人工知能が棋士を破る」といわれるようになり、スマートフォンのＯＳに「Ａｎｄｒｏｉｄ」という名が付けられるように、これらの呼称は極めて流動的に用いられている。ＡＩにさまざまな物理的デバイスを付けたものがロボットだということもできるし、ロボットの行動を制御する機構に焦点を当てれば、それをＡＩと呼ぶこともできる。

そもそも、機械の構成という側面から考えれば、「ＡＩ」や「ロボット」と呼ばれているものは、すべて単なるソフトウェア／ハードウェアである。それがわざわざ「ＡＩ」や「ロボット」と呼ばれるのは、人間との比較においてそれらが認識され制作される限りにおいてである。つまり、人間が自らと機械を比較する限りにおいて、機械は「ＡＩ」や「ロボット」になる。そこにおいて、人間は比較するものであると同時に比較されるものであり、Ａ比較対象となる事物の外部から比較する主体がそれらを眺めるという通常の外在的な比較のあり方は維持できなくなる。さらに、機械は自然物を人間が加工することで構成されるものであり、その形態や性質はあらかじめ定まっていない。また、実際にどのような機械が開発され普及していくかによって、人間のあり方も変わっていく。

生命を機械として捉えることによって人間を「自然の主人にして所有者」たる位置へと押し上げたデカルトの動物＝機械説において、比較するもの（人間）は比較されるもの（生物、機械）に内在しているが、比較を通じてその内在性が捨象され、機械と生物を客観的に比較できる人間（＝自然の主人にして所有者）が確立される。「動物＝機械ではないもの」として普遍的な「私たち＝人間」が抽出されるのだ。だが、こうした概念操作の代ショウ㋐として、人間との関わりにおいて融通無碍（ゆうずうむげ）に変化する機械が人間なるものへと無限に接近していく可能性を否定できなくなる。非近代社会においてはジャガーのような動物が人々と

の類比性（たがいに捕食する／される）において捉えられる。これに対して、近代社会は他の動物との内在的な比較から切り離された、動物の一部でありながら動物の上位に立つ「人間なるもの」を確立することに一定程度成功したと同時に、その代ショウとして、機械との内在的な比較のなかで自らを捉える機械のカニバリズムにはまり込むことになったのである。だが、機械との類比性は「私たち＝人間」の唯一性を脅かすものであり、だからこそ、オートマトンやアンドロイドやロボットといった機械人間に関するさまざまな語り口は、人々の希望や恐怖が込められた文化的表象として扱われてきた。機械人間たちは、「［　B　］」の帰趨（きすう）を決する政治や経済や戦争といったシリアスなテーマとは遠く離れたフィクショナルな存在として周辺的な位置へと隠されてきたのである。だが、現在のＡＩブームにおいて、こうした周辺性は維持しきれないものになりつつある。まさに、ホーキングらの記事において、ＡＩという最新の機械人間の誕生が、政治や経済や戦争との関わりにおいて「人類史における最大にして最後の出来事」となることが危惧されているように。

機械と人間をめぐる比較の根源的な流動性に関して、近代哲学における機械概念の変遷について論じた船木亨は次のように述べている。

> ひとびとは、適当な時代の機械を代表にしつつ、機械に対する自分のふるまいを標準にしながら、機械が何であるかを決めようとしました。また、その考えに応じて自分のふるまいを分析し、さらに機械を捉えなおそうとします。その結果として「人間は機械である」といい、あるいは「人間は機械ではない」と断言するのですが、そこからいえることは、機械と人間の関係を認識しようとする際に、ひとはそうした循環的で実践的な状況から逃れられない、したがってどこまでいっても客観的になることはできないということなのです。

機械と人間の関係における「循環的で実践的な状況」において、人間は比較の主体でありながら比較の対象でもあるという二重性を帯びる。こうした内在的な比較を通じて、C 機械の視点から自らを捉える機械のカニバリズムが現れる。それは、他者の視

点から自らを捉え、自らを他者としてつくりあげていく営イである。こうした比較のあり方を、筆者は、哲学者カトリーヌ・マラブーがヘーゲル研究や神経学に関する研究を通じて練り上げてきた可塑性概念を参照しながら、「可塑的な比較」と呼んできた。可塑性という概念には、「特定の姿かたちを与える」能力と「異なる姿かたちを受け取る」能力という意味が同時に含まれている。可塑的な比較は、比較を通じて比較の対象が形作られていくと同時に、比較をする主体自体もまた形作られていくプロセスによって構成される。

D 人類学という学問もまた、可塑的な比較に依拠している。「人類」の一部である近代社会の学問的素養を身につけた人類学者が、同じく「人類」の一部である非近代的な地域の人々（「彼ら」）と生活をともにしながら参与観察を行ったうえで、彼らの文化や社会を自らが育った近代社会の読者／聴衆（「私たち」）に理解できる仕方で説明する。その説明には、単なる状況の記述であっても「私たち」と「彼ら」の比較が暗黙のうちに入り込んでいる。「（私たちは○○であるのに対して）彼らは××である」という記述を生みだす過程において、私たち＝近代人（人類学者＆読者）は、比較の主体であると同時に比較の対象でもある。比較に対する通常の理解では、比較される対象は相互に独立しており、比較する主体が対象の外側からそれらを客観的に眺めることが前提とされる。だが、可塑的な比較においては比較される対象も比較する主体もたがいに影響を与えあいながら常に変容していく。

たとえば、極めて優秀な実績をもつ官僚と一代で大勢力を築き上げた盗賊団の首領の「かしこさ」を比較しなければならないという奇妙な状況にあなたが追い込まれたとしてみよう。

彼らの「かしこさ」は、それぞれに異なる存在者との関係性のなかで形成された異なる基準と密接に結びついており、容易に比較できるものではない。そこであなたはＩＱテストのような形式化された試験を実施することで両者の「かしこさ」を測ろうとするかもしれない。それは、官僚と首領を種々の存在者（テスト会場、テスト問題、ＩＱという概念、監視員、採点方法、採点者、獲得点数など）と結びつけることで彼らの「かしこさ」を俯瞰できる視点を形成することに他ならない。ネットワークが滑らかに機能し、ＩＱテストが首ビよく実施されれば、比較は安定化し、両者を a 「あなた」が現れる。だが一連

の手続きが滑らかにスイ行(エ)されるとは限らない。首領は手下を使ってテスト問題を盗み出し、あるいは監視員の買収や恐喝を試みるかもしれないし、これに対して、官僚はテスト問題の管理方法や監視員の選別方法に介入することで首領にズルをさせないようにするかもしれない。両者の思惑が交差するテスト会場はフン糾(オ)し、ＩＱテストは両者の「かしこさ」を比較する適切な装置ではないことが明らかになる。というのも、手下や賄賂や暴力を動員して違法行為を首ビよく行えることが首領の「かしこさ」の一部であり、ルールや人員を調整することで状況に［　b　］を与えることが行政官の「かしこさ」の一部だからだ。「かしこい官僚」と「かしこい首領」を支える異なる基準が相互に作用することでＩＱテストが構成する比較は不安定化し流動化する。途方に暮れたあなたは、むしろＩＱテストをめぐる闘争自体を適切な比較のモデルと考えて、新たな比較の方法を思いつくかもしれない。一連の過程を経て「かしこさとは何か」に関するあなたの考え方は次第に異なるものとなっていくだろう。

比較するものとしてのあなたの視点は、比較されるものとのさまざまな関係を通じて生みだされ［　c　］していくのであり、その外部にあらかじめ存在するわけではない。比較の平面が安定化すれば、あなたは対象に外在的な「比較するもの」として現れうるが、そのためにあなたは、それぞれ異なる基準をもつ「比較されるもの」との関係性に内在し、それらが滑らかに同期するような状況を模索しながら、自分自身の視点を常に変容させていくことになる。

以上の架空の例における比較の有り様は少なからず奇異に思われるかもしれない。だが、こうした状況は人類学者にとってなじみ深いものである。異文化における営イを自文化の読者に向けて説明する人類学者は、明示的な比較を行わないときでもさまざまな齟齬(そご)をきたす現地と自文化の基準に折り合いをつけることを試み、両者が部分的にではあれ重なり合う平面を模索しながら自らの記述を構成していくからだ。比較される対象も比較する主体も、あらかじめ決められた形をもった固定的な像を結ぶことはなく、比較という実践を通じてさまざまに変容していく。そこにおいて、人間の多様な経験的様態の一部でありながら、それらを俯瞰し比較し基礎づけることのできる「経験的－超越論的二重体」としての人間はもはや維持しえない。比較に外在する主体としての「私たち＝人間」を放棄することによって比較という営イの只中(ただなか)に生じる世界の可変性に目を向けること。それが、本書が提示する「［　F　］」の基盤となる発想である。

問1　傍線部Aとはどういう意味か。最も適切なものを次から選べ。 14

① 単なるソフトウェア／ハードウェアであった「AI」や「ロボット」が、人間の能力を超えていくこと
② 人間が機械と生物を客観的に比較できる存在として確立されるようになっていくこと
③ 人間が比較の主体であり対象でもあるという二重性を帯びる存在になること
④ 「ロボット」が動物の一部でありながら動物の上位に立つという位置付けを確立していくこと
⑤ 人類学のように参与観察を行うことで、情報の客観性を担保できるようになること

問2　空欄Bに入る言葉として、最も適切なものを次から選べ。 15

① 近代か非近代か
② 人間なるもの
③ AI技術
④ 機械人間なるもの
⑤ アンドロイドかロボットか

問3　傍線部Cとはどういう意味か。最も適切なものを次から選べ。 16

① 人間との比較において認識され制作される「AI」や「ロボット」のように、どのような機械が開発され普及していくかによって、人間のあり方も変わっていくということ

② 機械化が進む社会において、人間が機械や動物を客観的に比較できる視点を獲得することで、人間、動物、機械の共存を可能にする契機になること

③ 多くの情報があふれ、流動性の高い現代社会を生きる人間は、「AI」や「ロボット」といった機械の技術を活用することで、自分自身の視点を確立していくということ

④ AIという最新の機械人間の登場が、政治や経済や戦争との関わりにおいて「人類史における最大にして最後の出来事」になるのではないかと危惧されていること

⑤ これまで比較する側の人間は比較される側の機械に内在する構造にあったが、AI技術の急速な発展により、その内在性が捨象されていくこと

問4　傍線部Dとあるが、人類学のどのような点が可塑的な比較に依拠しているのか。最も適切なものを次から選べ。 17

① 人類学は、広く考古学、民俗学、解剖学などをまとめた学問であり、人類の由来や人類の変異について複数の対象の比較を通じて科学的な認識を得ようとする点

② 人類学は、近代社会の学問的素養を持ったうえで、非近代的な地域の人々と生活をともにする参与観察という手法を採用することで、近代と非近代の比較分析を志向している点

③ 人類学は、単なる状況の記述であっても「私たち」と「彼ら」の比較が暗黙のうちに入っており、私たち＝近代人は、比較の主体であり、主体は対象の外側から対象を客観的に眺めうることが前提となっている点

④ 人類学は、比較される対象も比較する主体もあらかじめ固定的に捉えるのではなく、比較という実践を通じてさまざまに変容していくスタイルをとる点

⑤ 人類学は、異文化における営イを自文化の読者に向けて説明するため、現地と自文化の共通点をみつけだし、読者の理解につなげようとする点

問5　空欄aからcに入る言葉の組み合わせとして、最も適切なものを次から選べ。 18

	a	b	c
①	外側から客観的に比較する	秩序	変化
②	内側から主観的に把握する	混乱	確立
③	外側から客観的に比較する	混乱	変化
④	内側から主観的に比較する	秩序	変化
⑤	外側から客観的に把握する	秩序	確立

問6　傍線部Eについて、それはなぜか。最も適切なものを次から選べ。 19

① デカルトの動物＝機械説では、生命を機械として捉えることによって人間を「自然の主人にして所有者」たる位置へ押し上げるに至ったから

② 機械と人間の「循環的で実践的な状況」では、比較を通じて比較の対象が形作られると同時に、比較をする主体自体もまた形作られることになり、どこまでも客観性を獲得することはできないから

③ 機械は自然物を人間が加工することで構成されるものであり、どのような機械を開発し普及していくかは、人間の経験を踏まえ、人間自身が決めていくものであるから

④ アンドロイドやロボットといった機械人間についての語りは、政治や経済というシリアスなテーマではなく、フィクショナルな存在として維持されてきたが、科学技術の発展により、その維持が困難になってきたから

⑤ 情報技術の急速な発展により人間の知的能力を上回るロボットが生まれ、これまで人間のみが有していた超越論的な視点を人間だけが独占することが不可能になるから

問7　空欄Fに入る言葉として、最も適切なものを次から選べ。 20

① 近代哲学論

② ＡＩによる人間の進化論

③ ＡＩによる人間の超越

④ ＡＩ時代を生きる比較文化論

⑤ 人間なきあとの人類学

問8 次のaからdを読み、本文の内容に合致しているものは○、そうでないものを×として、最も適切な組み合わせを次から選べ。 21

a 機械は人間が加工することで構成されるものであり、「AI」や「ロボット」といった機械は、すべて単なるハードウェア／ソフトウェアに過ぎず、人間の知的能力を超えることはない

b 「経験的－超越論的二重体」としての人間は成立しえない環境において、私たち＝人間は、AIなどの機械と相互に影響を与え合いながら、自らの変化を受け入れていくことになる

c 将棋ソフトが棋士との勝負で勝利を収めるなど、人間の知的能力をAIが上回る時代になったので、これからの人間は、いかにしてAIと共存していくかを模索していく必要がある

d 単なるハードウェア／ソフトウェアである「AI」や「ロボット」は、人間が自らと比較する限りにおいて「AI」や「ロボット」となり、人間のあり方に影響を与えるようになる

	a	b	c	d
①	○	×	○	○
②	×	○	×	×
③	×	○	○	○
④	○	×	○	×
⑤	×	○	×	○

問9 文中の二重傍線部㋐から㋔のカタカナ部分と同じ漢字を用いるものを次から一つ選べ。

22

㋐ 代ショウ

① 賠ショウ金を支払った
② ショウ害物競争に出場した
③ 町のショウ徴になった
④ ショウ涯賃金を検討した
⑤ ショウ拠集めに奔走した

23

㋑ 営イ

① イ師を呼んだ
② なんとかイ厳を保った
③ イ憾を表明した
④ 鋭イ努力をする
⑤ 夏休みを無イに過ごした

24

㋒ 首ビ

① 情勢の機ビをつかむ
② 身辺警ビの体制を整えた
③ アレルギー性ビ炎の薬を飲んだ
④ 華ビな生活をおくる
⑤ 飛行機の垂直ビ翼を修理した

25

㋓ スイ行

① スイ事場の掃除を完了した
② 栄枯盛スイは世の常である
③ 難しい仕事を完スイした
④ 委員長にスイ薦された
⑤ 科学技術のスイを結集した

26

㋔ フン糾

① 花フンの季節が到来する
② 火山がフン煙をあげる
③ フン別がつかない大人
④ 大切な書類をフン失した
⑤ 興フンする出会いとなった